

共生科学研究 10 号記念

■特別企画■

鼎談「共生科学の原点を語る」

——その視座と、目指すもの——

〔はじめに〕 昨年、星槎大学は開学 10 年を迎えました。我が国唯一の共生科学部としてスタートし、いま現在で在籍者が 5,000 余名、卒業生は 750 名を輩出するに至りました。本誌紀要も今号で 10 号目となります。ついては 10 号記念の特別企画として「鼎談 共生科学の原点を語る」を企画しました。10 年という節目に共生科学の原点に立ち返ることで、さらなる創造と発展を考える機会といたく、星槎グループ会長の宮澤保夫先生と星槎大学初代学長の山口薫先生、ききてには現学長の井上一先生に加わっていただき、星槎大学のルーツ、そしてなぜ共生科学なのかを、語っていただきました。

(2014.10.7 紀要編集委員会)



宮澤保夫
星槎グループ会長



山口 薫
星槎大学初代学長



井上 一
星槎大学学長
(ききて)

学長で、いまでも精神的な支柱としてご示唆をいただいている山口薫先生に、改めて共生科学あるいは星槎について伺っていくなかで、共に生きていくことが当たり前の共生社会、共感理解に基づく共生社会、そして平和というものに向かっていく力をいただければ大変嬉しいと思います。また現在は大学内に若い方も増えていますので、創設の経緯、星槎の根本理念をしっかりと伝えることも大事な目的の一つです。そして何よりも共生科学という言葉に象徴される営みに関して、今後への方向性が確認できたら、と思っています。鼎談に先だって、山口先生から、目を通すべき

「お前たち、しっかり勉強しているかぁ！」

井上： 本日の鼎談は共生科学の原点を見つめるということが大きなテーマです。星槎をつくられた創設者の宮澤会長、星槎大学初代

文献をいくつかご紹介していただきましょう。

山口：すでに公になっているものがありますので、この鼎談を読まれる方は、併せて次のものを読んでいただけたらと思います。以下に、挙げてみます。

- ・『共生科学研究』（紀要）NO.1
「発刊にあたって」（山口薫）
- ・『共生科学』（日本共生学会）NO.1
「設立趣意書」、
「日本共生学会設立にあたって」（山口薫）
- ・『共生科学』（同）VOL.5
「白山宣言」、「共生科学の展望」（山口薫）、
「共生に向けての共感理解教育の導入」（宮澤保夫）
- ・『人生を逆転する学校』（宮澤保夫）角川書店
宮澤会長の書かれたものには、創立者の創立理念が明記されています。また書籍は宮澤会長の、波乱万丈の人生と人間像が書かれていますので、ぜひ通読いただきたいですね。

井上：いま挙げていただいた文献は、私も自身繰り返し読んでおくことが必要だと思います。それでは、鼎談に移ります。まず星槎あるいは共感理解、共生社会を語っていくうえでは、星槎の歴史を抜きにはできません。本日は宮澤会長と山口先生のお二人にお越しいただいておりますので、最初に、その出会いからお話をいただきたいと思います。

宮澤：山口先生と最初にお会いしたのは、もう20年ぐらい前になります。宮澤学園¹⁾として、不登校、ヤンチャ系のこども、学校のほうで受け付けてもらえないこどもたちとの関わり方、彼らの社会参加のため何をしなくちゃならないかを現実的に考え、実行していた頃ですね。僕は、憲法や教育基本法に定められている、当然持つべき学習の権利が奪われることに関してものすごく疑問をもっていたし、以前から障害のあるこどもたちへの

思いも非常に強くて、社会参加するための一つの道筋として、一般的な教育環境があったほうがいいのかという漠然とした考えがありました。そのための試行錯誤をしているときに、山口先生から「学生に教育実習のようなことをやらせたい」と申し出があって、その後、先生から「……お会いしたい」とお話がきたんです。僕は当時、山口先生がそんなにすごい先生だと存じ上げていなかったの、「いいよ～、大学の先生？ 話したいことたくさんあるなあ」みたいな感じで（笑）。

山口：宮澤学園を訪ねてみると、ひとつひとつの教室をのぞきながら、ジーパンにスニーカー姿のおじさんが「お前たち、しっかり勉強してるかぁ！」と声をかけていてね（笑）。おもしろい人があるもんだなあと思ったら、入ってきて席に座って「私が会長の宮澤です」というので、ビックリしました（笑）。

宮澤：こどもたちに相対するいつもの自分の姿を見せたほうがいいのかと考えて、あえてジーパンにスニーカーにしたのですが、あときは大変失礼しました（笑）。お会いしたときの山口先生の印象は、とても穏やかな感じだけれども、鋭い切り口をもっていらっしゃる先生だな、と感じました。先生に「いま考えていること、やっていることとお話ください」といっていただいたので、とにかく一方的にしゃべりっぱなしで、思っていることを全部いわせていただいた。実は長い時間お話をして、きちんと聞いてもらったのは初めてだったんです。

二人の出会いが星槎にとっての歴史的瞬間だった

山口：宮澤さんが「ツルセミ（鶴ヶ峰セミナー）」²⁾や宮澤学園をやられていくなかで、

非常に大きな決断をされたなと私が感じたのは、不登校のこどもを学園に入れたということです。これは本当に素晴らしかったと思う。不登校のこどもが増えてくれば、当然その中には知的障害や自閉症、後から出てきたLD（学習障害）やADHD（注意欠陥・多動障害）のこどもたちがいるわけですね。そういうこどもたちには、文部省（当時）の教育課程を少し緩めたぐらいでは対応できない。

私は大学を出て3年間ぐらい知的障害の中学生を教えた経験があり、その後文部省で知的障害の専門家になって、東京学芸大学で教員もやらせていただいた。そのなかで、ひと言でいえば「生活中心教育」、生活のための生活による教育といった考え方が重要であることは理解していましたから。

宮澤： 実際にそうした複合的なこどもたちを一つの教室に入れて、どういう効果が出るかに対して僕自身も自信がなかったし、今後の新しい教育を自分の中では考えていましたけれども、それを社会がどれくらい受け入れてくれるか疑問を感じていたところだったんです。けれども山口先生は、僕の話を知ってくださった。ようやくいっていることが伝わる人が出てきてくれたと感じて、とても嬉しかったですね。最後に「いまあなたがしゃべったことは、実行して成功するかはわからないけれど、成功したら教育界の革命だね」といっていただいたのも嬉しかった。反面、責任も感じましたけれども。

井上： 山口先生とお会いした後、宮澤会長が本部に戻ってきて「すごい人に会った！話を聞いてくれて、すごい言葉をいただいた」と第一声でおっしゃったのを覚えています。お二人の出会い、単に大学の先生と学校を創っている人の出会いではなかった。そこから生まれたさまざまなことが世の中を変えて

いきましたし、これからも変えていくはずで。そういう意味で、歴史的な瞬間だったと思います。

宮澤会長も山口先生も、単なる学問・学術的なことではなく、実際にこどもとの関わりの中で四苦八苦しながらやって来られた。「現場」で実践されてきたからこそ、いろいろ響き合う部分もあったのではないかと思います。その一方で、それまでの星槎は本当に現場一辺倒でしたから、学問的・学術的な最先端の知識がもっと必要だった。宮澤会長と山口先生の出会いは、そういう意味で「現場」と「最先端の知識」がスパークした瞬間といえるかもしれません。

宮澤： 僕は現場で四苦八苦する人間ですから、知識よりも経験から得られる知恵を優先した。それに、知らない知識を自分たちで勉強することは必要だけれども、実際そんな時間はなかなかじっくりとはもてないわけです。いろいろなこどもたちが毎日いろいろなことをやるわけですから。警察に謝りに行く、近所に謝りに行く、そういう状態の中でやっていましたので、知識を技術的に取り入れる時間が取りづらかった。山口先生は専門家でありながら、現場もよく知っていられる先生でしたから、知識は先生からいただくほうがいいと、そのときは本当に思いました。

たとえば当時「学習障害」という言葉が出てき始めていましたが、これは先生たちが作り上げてきた領域の言葉です。当時の僕たちは、アメリカから文献を取り寄せて、数少ない資料の中で「こういうこどもたちがいるんだ」と理解するしかなかった。それが、高機能自閉症からいまでいう発達障害系に特化されるこどもたちについて、どういう状況でこうなるのかを山口先生にお聞きしたりし

て、ものすごくはやく理解できるようになりましたね。学問的な裏付けがある程度補強できるという自信も湧きました。これはもう先生に本当に感謝しなくちゃいけない。人の知的な財産を使って学べるという点で僕は非常にラッキーでした。おかげで学校構想もできてきましたし、「自分たちでこういう学校ができるな」と、あの時点で大学から大学院までのイメージが完璧に出来上がっていましたから。

星槎国際高等学校ができるまで

井上： 大学もそうですが、その前に、お二人の出会いから星槎国際高等学校の設置へものすごい勢いで向かっていくわけですね。星槎国際高等学校は日本の教育の歴史を変えたといった評価もいただいております。開校までの経緯はどのようなものだったのですか？

宮澤： 前身は、科学技術学園と連携してやっていた宮澤学園ですが、そこでの失敗として、求める人を全部救わなければいけないという思いから生徒が集まり過ぎたというのがあるんです。入れてもらえるのがうちしかないということで生徒たちがやって来て、全学年通じて400人の生徒数のはずが1200人ぐらいになってしまい、校舎も三カ所に分かれてしまって、先生方の仕事も「教えること」から「管理すること」に変わってしまった。こうなるともう学校ではない。そうした失敗があって、ちゃんと教育方針を主張できる学校をつくりたいという思いが強くなっていったんです。それを山口先生に伝えたら「おもしろい。やってみましょう」といってくださって。その頃、学校の誘致を計画していた北海道の芦別市にも一緒に行っていたいただいたんです。

山口： 新しい広域通信制の学校をつくりた

いというお話でしたね。それも各地に学習センターを置いて全国区でやりたいと。これも画期的で素晴らしい構想だったけれども、実現まではすごく大変でした。

宮澤： 大変でしたね。

山口： 芦別市の人口がどんどん減ってきてしまって、林政志市長（当時）が何とか地域を再生させようというので学校の誘致を計画して公募したわけです。それを聞きつけて市長に会いに行き、宮澤会長が熱弁を振るって市長を口説き落としました。ところが学校を設置するには知事の認可が必要で、その認可を取るのが本当に大変でした。詳しいいきさは、宮澤会長の本『人生を逆転する学校』に書いてありますので読んでいただきたいのですが、道庁学事課の担当課長が3人も変わったり、ようやく設置が認可されたかと思うと、私立高等学校連盟が生徒を取られるということで大反対してそれと闘って、各地に学習センターを作ろうとすると、今度はその私立の高校連盟が反対してと、とにかく苦勞をされた。それを全部突破されたわけです。

井上： ある人が「宮澤という人間は針で鉄板に穴を開ける」といっていたのですが、そのエネルギーの源はこどもたちが目の前にいることですね。

宮澤： 目の前のこどもたちに「君たちのための学校をつくる」と約束しているのだから、やらなきゃいけないわけですね。ただ一点、それだけです。

僕は誰もが得手・不得手があって当たり前と、それこそ当たり前のようには考えていますが、社会からするとそれはよくないことなんですよね。画一的に、また平均的になることがいいんだという話です。こどもだろうが大人だろうが、認められるには平均的な部分を要していないとまずいんだというモノの考え

方が僕はどうしても納得いかない。「でこぼこがあったって、みんなが普通に、一緒になって勉強できる」ということはとても大切なことだし、「ツルセミ」の時代から、身体的な障害はみんなでカバーする、知的障害はみんなでフォローアップする、これがうちの塾では普通でしたから、それを学校にしただけなんです。山口先生のいう「共生社会＝インクルージョンの教育」は僕たちの原点でもあるのですね。

山口：そこは非常に大事なポイントだと思います。私は、戦後の、戦後だけではないのだけれども、日本の教育の最大の過ちは「画一主義教育」だと思っています。みんな同じレベルで同じ教育課程をこなしていこうということで、一斉教室でやり出した。これが一番の問題だったと思いますね。

宮澤：そうした問題点まで含めて、みんなが普通に、誰でもが一緒になって勉強できる大切さが理解できる大人を作るには、星槎国際高校を作ってまず保護者に認めさせる、行政に認めさせる、そして一般に広く普及させていくことが必要だと思ったわけです。つまり、社会的必要性にしっかりと応えようとしたつもりなんです。

井上：それが星槎大学につながっていくわけですね。星槎大学の設立にあたっては、山口先生に初代学長をお願いしたのですが、大変なことも多かったのではないのでしょうか？

山口：大変だったですね。まず学長の申請書を出さなきゃならない。教員の名前も揃えなきゃいけないというので、教員の公募も必要でした。その公募の中には国立大学の教員と同じ給与を保障するということと、もう一つ芦別に移住するという条件もありました。芦別への移住はみんな OK したはずなんですけれども、実際に蓋を開けてみると誰も行かず、

行ったのは西永（堅）さんひとり。後は現地で採用した二宮（信一）さんだけで、文部省との間では、教授会は最初は関東地区でやって、翌月は北海道でという話だったのだけれど、そんなことできるはずもないですね。それが救われたのがテレビ会議です。これのおかげで、どこにいても教授会に参加でき、スクーリングも全国とつながれた。非常に意義があったと思います。

星槎大学はなぜ 1 学部 1 学科なのか

宮澤：それから学部の名前ですよ。最後に「共生科学部」と決まったのですが、僕は最初、学長と相談して「科学する学部」という名称を決めていたんです。そうしたら動詞はダメだと文部省に却下されてしまって。

山口：いま考えると「科学する学部」という名称は本当に素晴らしいと思うんですよ。なぜかという、学部は大きくは文科・理科と分けますね。文科系のほうはあまり関係が深くないかわからないけれど、理科系に並ぶいろいろな学問というのは、いまの共生科学の中で全部つながっているんです。そこまで考えれば、「科学する学部」というのはまさにどんぴしゃり、なのですね。

宮澤：最後の妥協点で「科学」の部分を残してもらえればいいということで、「共生する学部」で共生科学部としたのですけれども。「共生」という言葉が適切かどうかわからないのですが、先生と僕の共通の考え方は、「生きる」ことに対して差別がないことなんです。

「平和とは何か」「戦争とは何か」「争うとは何か」といったことも、先生との間でたびたび話題に上がりましたし、争うから差別や迫害、いじめといったものが出てくるわけですよ。先生と最初に話をしたときに、「障

害のあるこどもたちを理解してくれる組織を作ればいいんですよね」みたいな話から始まったのですが、とにかくそうしたこどもたちの置かれている状況は問題が多い。それでも幼稚園を最初に作ってみると、小さいときにみんなが一緒に生活することによって、こどもたちは違いを知り、補い合うようになっていきます。それをそのまま続けたかったんです。

1学部1学科にしたのも、生きるということ、つまり命ということですが、生きるため「命」ということをどう科学し、どう表現できるかに特化したかったからです。基本的に学問というのは、数学だろうが、建築だろうが、医学だろうが、みんな同じ「生きる」ことを扱っているわけで、それが学問の原点といえます。リベラルアーツという言い方もありますが、そうした言葉では決して片づけられないものだと思っているんです。

山口： もう一つ、私がすごいと思ったのは、「町の中に学校がある」ではなく、「学校の中に町がある」という発想です。サッカー場はもうできているけれど、それ以外に大磯キャンパスの周辺を広げていって、果樹園もあり、木工や陶工の作業場もあって、保育園や福祉施設もあって、郵便局まであってと、そういう大構想が宮澤会長の頭の中にはある。いまは土地の関係でなかなか進まない面があるけれど、諦めていないのでしょうか？

宮澤： まったく諦めてません（笑）。「学校の中に町がある」というのは要するに、行政など関係なく、僕たちはこういう町づくりがしたいんだということです。みんながそこで生活できること、みんながそこに集まってきてくれること、そして明るい笑顔がある町をつくりたいんですよね。障害者も健常者も関係なく、その人がもてる力で生きる努力をす

ることが僕は必要だと思っている。それが生きることであり、生活を科学することで、その場面をつくりたいと思っているんです。ただ「メト・ペマ村」構想³⁾、メト・ペマはブータンの言葉で「蓮の花」という意味ですけど、その構想を僕はもう20年も持ち続けていて一生懸命やっているんだけど、この頃誰も言わなくなってちょっと寂しいなと思っています。

町づくりこそが星槎のすべての原点なんですよね。たった2人の生徒から始まった塾ではあるけれど、あくまで僕は大学とか高校といった名称でなく、`教育機関、でいたいんです。いろいろな学校があって、いろいろなコースがあって、というのもとても大切なことですが、最終的には`教育機関、として星槎が一つにまとまることが最も大切だと考えているし、「日本の社会を変えていくために星槎がある、このキャンパスがあるんだ」と思えば、自分たちのアイデンティティも、もっとしっかり持てると思うんです。それが今あやふやになってきていて、ちょっと残念だなと思っているところです。

「共生科学」とは何か

井上： 創設者である宮澤会長が星槎大学の開学にあたって書かれた文章の中に、「本来生活と密着して自由な学問であるべきものが、細分化されて、横断性を失って、社会とも離れていっている」という言葉があります。また山口先生は、「共生科学の展望」の中で、「共生科学とは、人と自然、人と生物（微生物・動植物）、人（個人・集団）と人（個人・集団）の共生を目指し、それぞれの専門分野を、関連する専門分野と架橋融合しながら、目的実現の工程表を作成する実践科学であ

る」と述べられています。改めて、なぜ「共生科学」なのかをお話いただきたいのですが。

宮澤：「共生科学」を学問するということは、平たくいってしまえば障害とは何か？を理解するということです。生きるために何が障害なのかを考えることです。そのためには障害をもっている人を理解する社会を作らなければいけない。そのための大学をつくるのですから、学問が学問だけで終わらず、学んだことが実践として使われなくてはなりません。では、それには何をしたらいいか。

最終的には分かち合うこと、補い合うこと、そして理解する心をもつことができる社会を作っていくことが僕の大きな目的で、そのために必要なのが「他人側に立ったらどうなんだろう」と考えられることです。「この人は障害がある。ならば向こう側に立って考えなきゃいけないよね」というシンプルな考え方ができる人間を育てなくちゃいけないし、社会の仕組みとしてつくっていききたい。そのためには大学を通じて、心の中にある自分を再度耕す、確認する人間を増やさなきゃいけないと。最終的には人間一人ひとりの個人的価値観といったものに委ねられるのだろうけれども、実際に自分なりの哲学や価値観をもっていれば、毎日の経験を通して心を耕し続けることができますよね。

もう一つ、学問的な体系はとても大切なのですが、縦割りにして、横のつながりがないことは非常に問題だということです。学問はすべてに関連していて補い合っているはずなのだけれども、学者の先生たちは分野を作ることによって、自分たちの立場を作ろうとする。僕はそんな関係ないんです。たとえば「土」がある。「この土、こんなにすごいんだよ。だからうまいジャガイモができるんだ、サツマイモができるんだ」、たったそれだけ

で十分なわけですよ。それこそが共生の原点です。ジャガイモが原点なのではなく、土が原点なんです。土が原点だと水も関係してくるし、すべて関連してくる。すべてが必要になってくる。星槎の教育の本質は「生きる」ということ、哲学するということ、心を耕すということです。それをもってすれば、うちの学校は絶対にみんなに認めてもらえると思っているんですよ。

山口：ひと言でいえば、冒頭で紹介した論文「共生に向けての共感理解教育の導入」が、これまでの星槎大学であり、これからの星槎大学であり、共生科学学会であるということに思いますね。

宮澤：共感理解教育については昔から類似する言葉があるけれど、僕がやろうとしている共感理解はそれとは違うんです。共感理解というのは相手の立場に立って、自分を見てみるということです。相手のいうことを何でも「いいですよ」と受け入れることではない。共感理解教育と言葉でいうときれいに聞こえるけれど、めちゃくちゃ複雑で、ものすごくややこしいこともある。けれど通じ合う部分がものすごいエネルギーを生む。それが広まっていれば社会は変わるだろうということですよね。

社会を変えていこうとしたとき、教育はすごい力を発揮するはずなんです。だから教科教育もとても大切だけれど、教育を教科教育だけで終わらせてはいけない。相手の立場に立って見てみたとき、はじめて「これをしなければいけないな」が自発的に出てくるわけですから、共生社会の実現には共感・理解する教育こそが最も大切になる。そうした学校づくりをしたいと考えていますから、僕にとって教える側が「教えるだけの人」になっては困るわけです。「いつでも、どこでも、

誰でも学べる大学」としたのは、教える側も教えられる側も、「みんなが参加する」という意識をもってほしかったからです。

井上： 星槎の理念の根っこをしっかりと掴んだ上でかたちにしていくと、そこからいろいろな揺らぎが起こって、結果的に社会が変わっていくということですね。

大学ができたときに山口先生がご講演された録音を聞いたことがあります。その中で先生が最後に「自分たちがやっていることは社会を変える運動なのだ」とおっしゃって心が震えました。

山口： 私は楽しみながらやっているだけなんですよ（笑）。ただ、戦争のない社会をつくりたいという思いは変わりません。星槎の三原則にある「仲間をつくる」というかたちで、それが社会に広がっていかなくてはいけないと思っているのです。

「みんなちがって、みんないい」

井上： 会長が大学設立の挨拶で書かれた文章は「優しさと強さを兼ね備えるための共生に関わる心の耕作と共生社会の実現を目指す」という書き出しで始まっています。ここに「強さ」が入っていることはすごいと思いました。星槎が考えている、あるいは目指している共生は、決して生ぬるいものではない。ある程度の厳しさを覚悟したうえでの共生になっていくでしょうし、その厳しさを受け入れるだけの強さが我々にも必要になってくるということですね。

宮澤： 優しさだけだと、すぐに気持ちが萎えてしまうし、闘うことを諦めてしまう。だからこそ強さをもたなくてはいけないんです。「優しさと強さ」とは、つまりは責任感、責任感より「責任力」といったほうがい

いかかもしれない。僕たちが目指さなければならぬのは共生社会の実現ですが、これは正直いってむずかしいことです。けれども「星槎としてそこを見失ってはダメだよ。闘いましょう。諦めないでやりましょう」ということを伝えたかったんですね。そのためにも心を耕して、責任力を培ってもらいたいと思っているんです。でも未だに「お前、まだそんな青臭い、夢みtainなこと言ってるのか」とか言われていますが。

井上： 最後に、お二人から強烈なメッセージをいただければと思います。

山口： 私からは一言。詩人・金子みすずさんの「わたしと小鳥と鈴と」の中の最後の行ですね。「鈴と、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい」。これに尽きると思います。

宮澤： 世界で最初の共生科学部として、共生ということを全世界にしっかり伝えたいですね。どの宗教だろうが、どの国だろうが関係なく、相手の立場に立って考えること、それが僕の望みです。さらに言えば、みんなには「あなたにとって私は必要な存在だ」と思える人間になってほしい。相手にそう思ってもらうというより、自分が思えるということです。たとえば「生徒から信頼される先生」になるのはそれほどむずかしいことではないんです。しかし「生徒を信頼する先生」になることはむずかしいのです。でもそれが共生を教える立場に立つ人のあり方だと僕は思っています。新しい人たちには特に、共生を広めるためにできている大学であり、グループなのだということを知ってほしいと思います。

井上： ありがとうございます。

注 記

1) ツルセミ

1972年4月にアパートの一室で生徒2名からスタートした学習塾。開塾当初は「鶴ヶ峰セミナー」という名称であったが、こどもたちが省略して呼んでいた「ツルセミ」が正式名称となった。

2) 宮澤学園（現・星槎学園）

1984年12月に開校した学校教育法第45条の2（当時。現在は第55条）で定義

される技能教育施設。通信制高校と連携して、高校卒業の単位を修得させる。企業の技術者養成を目的としない日本で初めての技能教育施設。

3) 「メト・ペマ村」構想

老若男女や障害の有無に左右されることがなく、すべての人々が生活することができる場所（村）を作るという構想。「メト・ペマ」とはゾンカ語（ブータンの国語）で「蓮の花」の意味である。



2014年10月7日 於・吉祥寺東急ホテル



〔鼎談を終えて〕 非常にエネルギーに満ちた、示唆に富む、楽しい鼎談となりました。私にとってお二人は生涯の師匠です。若輩の私は、お二人のお言葉の端々にまで自分自身の理解が届くことを祈りつつ臨ませていただきました。大学を創った人間と直接話をするができることの喜びを噛み締めると同時に、その志を引き継ぐ役割を担う者の一人として、自分の器の小ささを実感させられた時間であり、言葉や理屈では

ない、「行動する魂」が非常に眩しく思えておりました。大学をはじめとするすべての星のいかに、無限のエネルギーをみなさんから受け取りながら、いつまでも天空を周り、社会に対する影響力を強く発揮し続けていくことを祈念します。最後にこの鼎談の実現から星槎大学紀要への掲載までご尽力をいただきました紀要編集委員会の皆様はじめ、星槎大学の教職員、関係各位に厚く御礼を申し上げます。（井上 一）